それは、ぴかぴかの太陽とあお色の空がきれいな朝。
ベッドから起きて鏡を見たらわたしはカエルになっていました。

みんながわたしのことをカエルだというから、
わたしは魔法にかけられてしまったのかもしれません。
早く人間に戻りたいな。

わたしの家にはかみさまがいます。
みんなはかみさまはすごい、すごいといいます。
かみさまにお願いをしたら、なんでも叶うと言います。

かみさまは、わたしの魔法をといてくれるかしら。

わたしは人間になりたくてしょうがなくって、お母さんに聞きました。

どうしてわたしはカエルなの？

お母さんはおどろいて、そんなことを言わないで

とわたしに怒りました。

わたしはびっくりしてしまって、涙もでてこなかったの。
だって、お母さんが泣くんだもの。

もし、あなたが魔法をといてくれるなら、
わたしはあなたが誰でも、あなたがかみさまだと思うの。

早く人間になりたいな。

ある日。
ずっと病気だったおじいちゃんが、永い眠りにつきました。
おとうさんもおかあさんも泣いています。

わたしもとっても哀しいのに、カエルになった日から泣けないの。

大人たちが忙しくしているお葬式のあいだに、
おじいちゃんの小さな骨をこっそり拾ってポケットに入れました。

森の中でひとり、おじいちゃんのお葬式をしました。
わたしの唄う歌はまるでおかしくて、でたらめ。
気がついたらあたりはまっ暗でしんとした夜になっていました。
空にはたくさんの星がきらきら輝いていてとてもきれい。

くろくてたくさんの木の向こうで、何かがぴかぴかと光っています。
そうしたら、目が覚めるようなきれいな男の子がこっちに歩いてきました。

これは夢なのかな。ここはどこなのかな。

こんなにきれいな夢だったら、もしかしたら魔法が解けるかもしれない
とわたしは思いました。

男の子は、きみのことはよく知っているよ。
といいました。

わたしはびっくりして、何もいえませんでした。
でも不思議と怖くありません。ずっと知っている人みたいです。

そして男の子は、
君の心はあお色だね
と言いました。

どうして？とわたしは聞きました。

だって君は、自分をカエルだって思い込んでいるかわいそうな女の子だからだよ。

おしまいまで聞いたとたん、ひかりがいっこも無くなって、なにも見えなくなりました。

目がさめたらベッドの中でした。
いつもとおなじ朝。あお色のそらとぴかぴかの太陽。

ふと鏡をみると、そこにうつっているのは人間のわたしでした！

あれは夢だったの？

でもおじいちゃんの骨がありません。

ほんとうの事は目に見えないのかもしれません。
私の家には人形がまだかみさまのように座っています。